



Title	フランク・ロイド・ライトの有機的空間ヴィジョンの成立 : 浮世絵版画の影響を中心に
Author(s)	小関, 利紀也
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 119-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52959
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランク・ロイド・ライトの有機的空間ヴィジョンの成立

— 浮世絵版画の影響を中心に —

小関利紀也／高岡短期大学名誉教授

I. 与えられた課題

ライトは1900年頃からプレーリー・ハウス、1904年にラーキン・ビル、1906年にユニティー教会と、世界に先駆けてモダン・デザインの金字塔をうち立てたが、1910年にベルリンで発表された、それまでの作品の展覧会与作品集は、ドイツ、オランダ、ベルギーに広範な影響を及ぼしたのであった。欧米に未だ空間の意識がなかった19世紀末に、この空間のデザインは如何にして成立したのか？

ライトの建築空間の成立には、1893年のシカゴのコロンビア博覧会に出展された日本の鳳凰殿の影響が指摘されるが、その具体的現れはプレーリー・ハウスであったり、ユニティー教会であったり、ラーキン・ビルの『箱の破壊』の発想であったり、いずれも博覧会からかなり遅れた時期のことで、そこに至る影響関係の曖昧さが残るのは否定出来ない。それにライト自身は、日本建築のこの時期の影響を、繰り返し否定しているのである。

そこでライトのそれ迄の建築思想を見る必要があるが、もともとライトの有機的建築の思想は、その敬愛する師サリヴァンの“有機的”の考えに基づくものであった。サリヴァンは、人間の精神的なものも身体的感覚の高められたもの、とする触感的な機能主義形体観から、伝統的なイマジネーションの芸術を否定し、またプラスチックな量塊に集中して、建築空間の創造には消極的であった。

このサリヴァンの有機的思想を共有したライトが、イマジネーションによる伝統的芸術を否定したのも当然であったが、ライトは建築の芸術的価値に対して無関心であることは

出来なかった。そしてまた、こうした彼が独自の有機的建築の空間思想を、如何にして発展させ、実現することが出来たのであろうか。

II. 摸 索

シカゴ博覧会前の1890年、オーク・パークに建てられたライトの自邸には、入り口の間、居間、食堂の開口部で連なった“流動的な空間”(K. キルシュ)が認められている。

もっとも、ライトがこの自邸で作り出した“流動的な空間”は、サリヴァンの教えそのままに「人間の身体を尺度として、家全体を標準の身長に合わせ」て、(『自伝』)行動の流れの結果として実現したものであった。けれども、こうした触覚的な空間は、現代的空間としては成立しない。

後にライトはこうした触覚的空間の建物を否定して「建物を洞窟^{ケイヴ}としてではなく、開かれた視野^{ヴィズ}、外部の視野^{ヴィズ}、内部の視野^{ヴィズ}にかかわる広い掩蓋^{シェルター}として見始めた」(『有機的建築』)ことを述べている。

ライトが繰り返し日本建築の影響を否定したのも、当時のライトには、日本建築の視覚的空間を認める芸術感覚が働かなかったのではなかったかと考えられる。そうであればライトはその触覚的建築空間に、如何にして現代の視覚を取り込むことが出来たのだろうか？

そればかりではない。サリヴァン同様に非有機的として、伝統的なイマジネーションの芸術的価値を否定してしまったライトには、様式とは何か？新しい芸術的価値を何処に見出したらよいか？が深刻な問題であった。

この当時、パラディアン・コロニアル、テュー

ダー等と“地獄の”摸索を続け、様々な様式を渉猟していたライトの、自邸内部の状況はB. B. ファイファーによって、「これらは全て信じがたいほどの混乱の中に寄せ集められており、すぐにこの若き建築家の特徴となるシンプルさと静けさは不思議なことにここには見られない」と述べられている。

III. 浮世絵との邂逅

その頃、1892年とライトは言うが、「新しい芸術価値を指し示す光」（『版画とルネッサンス』）として現れたのが浮世絵であった。

ライトは浮世絵に強い視覚性を認めているが、ある時からこの視覚的な浮世絵に、通常的生活表現を意図して「人間の触感によってとらえられ、具現された、我々が精髓、卓越の証しとする内的調和の標準^{メジャー}」（『日本の版画——一つの解釈』）を認めるようになり、ここに芸術の真実があることを理解する。

現代の空間論によれば、空間の知覚は視覚と触覚の整合の過程で成立するが、ライトは浮世絵に触感と統合された視覚的空間の感覚を見出だして、“有機的としての単純さ”と呼び、その新しい感覚が1893年頃から次第に頭の中で形成され始めたこと（『自伝』）を述べている。そしてこの「完全な統合性の顔と見られる“有機的単純性”の理想」が「当然のこととして全ての調度品を排除し、古い家具や全てのカーペット、大部分のカーテンを、不適切あるいは表面的装飾として否定」（『有機的建築』）することになったと言う。

1895年の自邸の改築の結果は、まさにこの言葉のとおり、突然の著しい変化を示し、「小さな装飾品、染織柄、美的な髪をとったショールやカーテンの優雅な効果は取り払われて、食堂は単純で明快になり、居間には空間の高さの遊びが取り入れられ、子供の遊び部屋は視覚的な純粋空間の始まりを示すもの」

（K. キルシュ）となっていたのである。

IV. “単純化の真理”と“有機的統合性”

後にライトは自伝で、浮世絵の「版画は読者の想像以上に私を語ってくれる。もし私の教育から日本の版画を差し引いたら、全体がどの方向をとったか私には解らない。芸術において無意味なものを取り除くという版画が説く教えは、立体主義や未来主義を発展させたフランスの画家たちに理解されたように私の建築に理解された」と記し、『日本の版画——一つの解釈』では「ドイツとオーストリアのゼツェーションは、この芸術の影響をうけて“単純化の真理”^{ゴッセル・オブ・シンプリシティ}を、そして芸術作品の“有機的統合性”^{オーガニック・インテグリティ}が美の基本法則であることを学んだ」と言うが、これはとりわけライト自身にとっての真実であった。

ここで言う有機的統合性とは『建築のために— I』で「建物の制約における特有の問題の解決と、芸術的表現力の様式化の統合」であるとされており、ライトが浮世絵に、サリヴァンと共有する有機的な触覚的建築の世界と、浮世絵の視覚的表現の世界との統合による空間のヴィジョンを認め、それを有機的統合性と呼んだことが理解される。

そしてまた、無意味なものの除去、単純化の真理と呼ばれたものは、この有機的統合性の単純化、明確化に他ならず、ここに「有機的単純性の理想」が成立するが、ライトの「建築において理解された」無意味なものを取り除く浮世絵の教えとは、ライトが浮世絵に見出だし、その建築において実現した有機的空間のヴィジョンの純化であった。この時には既に、鳳凰殿の視覚的空間はライトの眼に明らかなものとなっていたに違いない。

以後ライトは、自邸の製図室、図書室をはじめ、ウィリッツ邸等のプレーリー・ハウスの建築空間の試みを意欲的におし進める。